様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２６０３

研究課題名（和文）日英語の意味・語用論的志向性に関する記述的・理論的研究

研究課題名（英文）A descriptive and theoretical study of the semantico-pragmatic preferences of English and Japanese

研究代表者
今野　弘章（Konno, Hiroaki）

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：８０４３３６３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、英語と日本語がそれぞれ示すとされる意味・語用論的な傾向に注目し、そういった意味・語用論的傾向が、個別の言語表現に内在化されている意味・語用論的な機能によって解除される現象が存在することを明らかにした。そして、このような現象を「デフォルト志向性の解除」と呼び、この視座から、一見関連がないように思われる様々な例外的表現を自然類として捉えることが可能となることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
デフォルト志向性の解除という観点は、関連するデフォルト志向性の存在を否定するものではなく、むしろその志向性を補完し、日英語がそれぞれ示す文法的振る舞いを総体的に捉えようとするものである。日英語においてデフォルト志向性の解除が存在することを経験的に示したという本研究の成果は、同時に、先行研究が指摘する両言語のデフォルト志向性の存在を逆説的に裏付けるという理論的意義を持つ。さらに、デフォルト志向性の解除は、一見関連がないように思われる様々な例外的現象を統一的な視座から捉えることを可能とするという方法論的意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：This research focused on some general semantico-pragmatic tendencies of English and Japanese, and demonstrated that the two languages not only have grammatical constructions consistent with such tendencies, but also have constructions that are not, constructions characterized as "default preference overrides," where the specialized or preferred semantico-pragmatic function of a given construction overrides the general semantico-pragmatic tendency of the language. It also showed that the notion of default preference override makes it possible to group exceptional and apparently unrelated cases into a natural class.

研究分野：英語学

キーワード：デフォルト志向性の解除　語用論　類型論

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

認知言語学をはじめとする機能主義的対照研究により、日本語と英語が無標の場合に示す意味・語用論的な傾向（「デフォルト志向性」）が明らかにされてきた。この流れに位置づけることができる研究に、以下の 3 つがある。

(1)「日本語の非伝達的表現志向性／英語の伝達的表現志向性」

廣瀬 (1997)および廣瀬・長谷川 (2010)は、伝達を目的とした言語表現と伝達を目的とせず思考の表出を目的とした言語表現という語用論的区別に着目し、「英語は伝達的表現を無標の表現レベルとするのに対し、日本語は非伝達的表現を無標の表現レベルとする」というデフォルト志向性を指摘している。

(2)「日本語の状況内視点志向性／英語の状況外視点志向性」

中村 (2004)、本多 (2005)、池上 (2006, 2007)は、事態把握の観点から、「英語は話し手が自ら述べる状況の外に視点を置いて述べる傾向が強いのに対し、日本語は話し手が自ら述べる状況の内に視点を置いて述べる傾向が強い」という認知的デフォルト志向性を指摘している。

(3)「日本語の動詞枠付け志向性／英語の衛星枠付け志向性」

Talmy (2000)は、類型論的観点から、「事象を記述する際、その事象の中核となる部分を、主動詞以外の『衛星』的要素として具現化する『衛星枠付け（satellite-framed）言語』と主動詞そのものとして具現化する『動詞枠付け（verb-framed）言語』がある」というデフォルト志向性を指摘し、英語を前者、日本語を後者に分類している。

これらの日英語の特性は、デフォルト値である以上、絶対的なものではない、すなわち、両言語にはそれぞれの志向性に従わない現象も存在するということを含意する。しかしながら、上で紹介したものも含め、従来の研究は、日英語のデフォルト志向性を示すことに主眼が置かれたものが多く、それらの志向性に従わない現象を中心に据えたものは稀である。結果として、デフォルト志向性に従わない現象に具体的にどのようなものが存在するのかは十分に明らかになっているとはいえない。

２．研究の目的

本研究は、(1) 日本語の非伝達的表現志向性／英語の伝達的表現志向性、(2) 日本語の状況内視点志向性／英語の状況外視点志向性、(3) 日本語の動詞枠付け志向性／英語の衛星枠付け志向性の 3 つのデフォルト志向性を対象に、それらに従わない「例外的」現象を明らかにすることを目的とする。より具体的な目的は以下の 3 点である。①日英語のデフォルト志向性が、所与の構文が特化させているあるいは志向する意味・語用論的機能によって解除される現象（「デフォルト志向性の解除」default preference override）が存在することを経験的に示すこと。②個々のデフォルト志向性の解除が成立する要因を、統語論と意味・語用論のインターフェイスの観点から明らかにすること。③デフォルト志向性の解除という概念が持つ方法論的・理論的意味合いを考察すること。

３．研究の方法

本研究の最重要課題は、先行研究による日英語の 3 つのデフォルト志向性が解除される現象を記述することにある。そこで、年度毎に一つのデフォルト志向性に注目し、そのデフォルト志向性が解除される現象が存在するかどうかを検証した。それぞれのデフォルト志向性解除については、事実を記述するだけでなく、可能な限り、当該の解除の動機付けを、形と意味のインターフェイスの観点から考察した。研究の総括として、デフォルト志向性の解除が持つ意味合いを考察し、さらなる研究の発展の可能性を探った。

４．研究成果

研究期間全体を通じ、日英語のデフォルト志向性に従わない例外現象が存在すること、それらの現象が持つ理論的意味合いを形と意味のインターフェイスの観点から示すことができた。さらに、デフォルト志向性の解除がどういった課題を新たにもたらすかを考察し、本研究の成果を今後の研究課題に繋ぐことができた。

(1)「日本語の非伝達的表現志向性／英語の伝達的表現志向性」に関する成果

研究代表者のこれまでの研究成果を含む先行研究の知見を活用し、日本語形容詞「やばい」の副詞的用法、日本語複合助詞「からの」の単独用法、英語の mad magazine 構文、英語の日記文における主語省略の 4 つが、当該の志向性を解除する現象「デフォルト志向性の解除」として特徴付けられることを明らかにした。これにより、本研究の中核をなす「デフォルト志向性の解除」という概念の基礎固めを行った。

「やばい」の副詞的用法と「からの」の単独用法は、それぞれ、伝達的使用を志向する、伝達的使用に特化しているという点で日本語の非伝達的表現志向性の解除として捉えられる。mad magazine 構文と日記文の主語省略は、非伝達的使用に特化しているという点で英語の伝達

的表現志向性の解除と捉えられる。このうち、「やばい」の副詞的用法、「からの」の単独用法、mad magazine 構文がデフォルト志向性の解除であることを示す経験的証拠には、代表者のこれまでの研究成果を援用した。英語日記文における主語省略が非伝達的使用に特化しているという、当該の現象をデフォルト志向性の解除と捉える上で重要な性質は、廣瀬 (2006)によって「日記」という使用場面を根拠に指摘されているのみであった。本研究では、この語用論的性質が、動詞 tell の直接話法補部への埋め込みを利用した文法的テストによって確認できることを明らかにし、先行研究の指摘を経験的に裏付けた。

この関連で、日英語の非伝達的表現の研究を進め、以下のことを明らかにした。日英語の非伝達的構文は、「非伝達的」という語用論的特徴においては共通するが、その使用場面に関しては異なる振る舞いを示す。日本語のイ落ち構文が独話と対話の両発話場面で問題なく使われるのに対し、英語の Mad Magazine 構文と日記文における一人称主語省略は、それぞれ対話と独話の場面でのみ使用可能という差である。この差が、日本語の非伝達的表現志向性／英語の伝達的表現志向性に対して持つ意味合いを考察し、次の一般的関係が成立する見通しを得た。所属言語のデフォルト志向性の解除に相当する構文は、そうでない構文に比べ、より使用場面上制限される。

(2)「日本語の状況内視点志向性／英語の状況外視点志向性」に関する成果

当該志向性が解除される現象の有無を主に文献調査によって検証した。調査により、デフォルト志向性の解除として位置づけられる現象の候補を絞り込むことができた（英語の懸垂分詞構文（早瀬 2009）、日本語の再帰表現の一部（Hirose 2014））。だが、それらの現象に対して独自の記述や分析を提出するまでには至らなかった。当該の志向性については、今後も調査を継続する必要がある。

(3)「日本語の動詞枠付け志向性／英語の衛星枠付け志向性」に関する成果

Talmy を端緒とする日本語の動詞枠付け志向性／英語の衛星枠付け志向性に関する先行研究を調査し、当該のデフォルト志向性が解除される現象を研究した。本研究が独自に扱った現象は「掲示｛に／を｝注意する」における格標識の交替（ニ／ヲ交替）である。有標の「掲示を注意する」は「掲示を注意して見る」を意味し、前者で統語的な主動詞「注意する」が認可しているように映るヲ格は、後者における意味的な主動詞「見る」によって認可されている。これは、日本語における lexical subordination（Levin and Rapoport 1988)の事例と考えることができる。そして、「掲示を注意する」と「掲示を注意して見る」の意味的関連は、「X に注意するときには X を見る」という注意と視覚のメトニミー関係に動機付けられている。このように、「掲示を注意する」は、格助詞ヲが文全体の意味的性質を決定しているという点で、日本語における衛星枠付け表現すなわちデフォルト志向性の解除と位置づけられる。松本（編）(2017)によれば、視覚的放射表現（松本 2004）においては Talmy の類型的特徴付けが成立しないことが指摘されている。「掲示を注意する」は、「掲示を注意して見る」との意味的関連から、視覚的放射表現の一種と捉えることができ、本研究の分析は先行研究の指摘を支持する。

(4)その他の成果

本研究期間中に行ったその他の研究成果として、次の 2 点を挙げることができる。まず、日本語のイ落ち構文に関する研究を進め、当該構文が主述構造を備えていることを示す経験的論拠を指摘した。研究代表者は、過去の研究でこの構文が主語を持つことを主張した（今野 (2012)）。その分析に対し、当該構文が主語を持たないとする分析が近年発表された（清水 (2015)）。この対立を受け、両タイプの分析のどちらが妥当かを検証し、形容詞語幹の項構造、主語志向の再帰代名詞「自分」の生起、文イディオムの認可等の観点から、当該構文に主語を仮定する分析が経験的に支持されることを明らかにした。

また、時制辞を持たない日英語の主節現象を対象として、個別言語の時制体系と時制標示の欠落の相関についての予備的考察を行った。具体的成果として、直示的時制辞を持つ英語と持たない日本語において、時制辞の欠落という同一の形態統語的特徴が及ぼす意味的効果が異なる可能性を指摘した。

(5)さらなる発展の可能性

デフォルト志向性の解除という観点から分析を行ったことおよび日英語の非伝達的構文と時制辞を持たない構文に関する萌芽的研究から得られた見通しから、構文の文法的特殊性を個別言語の文法体系一般と関連付けて捉える必要性が明らかとなった。この考察をもとに、本研究から派生する新規研究課題を設定した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

(1) 今野弘章 (印刷中)「注意と視覚とニ／ヲ交替」『日本認知言語学会論文集』19, 11pp. 掲載ページ未定, 査読無.

(2) 今野弘章 (2017)「イ落ち構文における主語の有無」, 天野みどり・早瀬尚子（編）, 『構文の意味と拡がり』, 163-182, くろしお出版, 東京. 査読無.

(3) 今野弘章 (2017)「デフォルト志向性の解除」, 廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子（編）,『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』, 69-89, 開拓社, 東京. 査読有.

〔学会発表〕（計 16 件）

・学会発表（計 2 件）

(1) 今野弘章 (2018)「注意と視覚とニ／ヲ交替」日本認知言語学会第 19 回大会, 静岡大学.

(2) Hiroaki Konno (2018) "English and Japanese Constructions without Hearer-Orientation," Paper read at the Workshop on "English and Japanese as Seen from the Three-Tier Model of Language Use" at the Fifth International Conference of the International Society for the Linguistics of English (ISLE5), UCL.

・招待講演（計 4 件）

(1) Hiroaki Konno (2018) "English and Japanese Constructions without Hearer-Orientation," Invited talk given in a seminar in linguistics at the University of Tsukuba.

(2) 今野弘章 (2016)「イ落ち構文の特異性－主語の有無の観点から」（招待講演）, 意味論研究会（第 4 回）, 静岡県立大学.

(3) 今野弘章 (2016)「イ落ち構文における主語の有無」（招待講演）,「『三層フェスタ』プレワークショップ：若手が拓く言語研究の新領域」, 筑波大学.

(4) 今野弘章 (2015)「日本語の伝達的構文・英語の非伝達的構文とデフォルト志向性の解除」（招待講演）, 科研費講演会「構文ワークショップ」（科研費基盤研究（C）「日本語の自動詞構文と意味に関する研究」課題番号：25370527, 研究代表者：天野みどり）, 大妻女子大学.

・研究会での発表（計 10 件）

(1) 今野弘章 (2018)「注意と視覚とニ／ヲ交替」洛中ことば倶楽部第 16 回例会, 同志社大学.

(2) 今野弘章 (2018)「ニ／ヲ交替から見た注意と視覚の隣接関係」第 6 回筑波英語学若手研究会, 筑波大学.

(3) 今野弘章 (2018)「ニ／ヲ交替から見た注意と視覚の隣接関係」第 26 回奈良女子大学英語学・言語学研究会, 奈良女子大学.

(4) 今野弘章 (2018)「『注意する』の二／ヲ交替とその動機付け」研究会, 関西大学.

(5) 今野弘章 (2017)「問い返し疑問と時制体系と時制辞の欠如」, 洛中ことば倶楽部第 12 回例会, 大阪大学.

(6) 今野弘章 (2017)「問い返し疑問文と時制辞」, 第 5 回筑波英語学若手研究会, 奈良女子大学.

(7) 今野弘章 (2016)「イ落ち構文と主語」, 第 4 回筑波英語学若手研究会, 奈良女子大学.

(8) 今野弘章 (2016)「イ落ち構文の主語について」, 洛中ことば倶楽部第 7 回例会, 奈良女子大学.

(9) 今野弘章 (2015)「日本語の伝達的表現と英語の非伝達的表現」, 第 3 回筑波英語学若手研究会, 奈良女子大学.

(10) 今野弘章 (2015)「デフォルト志向性の解除－日英語の伝達性との関連から」, 洛中ことば倶楽部第 4 回例会, 同志社大学.

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

・出願状況（計 0 件）

・取得状況（計 0 件）

〔その他〕

研究代表者ホームページ

https://sites.google.com/site/onnokikaorih/

６．研究組織

(1)研究分担者

なし

(2)研究協力者

なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。